

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	阿部 翔太
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 村上春樹研究—「音楽」という方法—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	有元 伸子	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	妹尾 好信	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	大地 真介	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	下岡 友加	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	跡上 史郎 (熊本大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、現代日本を代表する作家・村上春樹（1949-）の文学を、「音楽」との相関性に着目して考察したものである。ジャズ喫茶のオーナーから小説家へと転身した村上は、音楽への嗜好を繰り返し語り、音楽が摂取された小説も多い。したがって従来から村上文学にとっての音楽の重要性は指摘されてはいたものの、一方で表層の意匠に過ぎないと軽視されてもきた。本論文は、こうした村上と音楽との関係に正面から切り込み、世界的に愛好された音楽グループ・ビートルズ（The Beatles）との関係を中核に、村上が創作の基軸にすえた音楽の変遷過程や音楽を導入する方法的な意味を明らかにした。</p> <p>論文は、序章、3部9章からなる本論、終章と、資料編により構成される。</p> <p>第Ⅰ部「村上春樹と音楽文化」（3章）では、本論文における考察の前提として、村上の文学観・音楽観と彼のビートルズ受容の遍歴に関して整理を行った。最初に村上が近年取り組んでいるラジオDJ（FM東京「村上RADIO」）における選曲を調査することによってカバー曲への強い愛着を抽出し、古今東西の様々な作品を換骨奪胎する村上の小説創作スタイルとの類似性を示した。続いて村上のビートルズ受容を丁寧に検討した。ビートルズ全盛期の1960年代に村上がビートルズを敬遠していた理由を、同時期に「ミーハーな少女たちの音楽」と見なされていたからだと推測する。1980年代後半に、村上はビートルズとの「和解」を宣言した。そこには音楽性への再評価、映画『ノルウェイの森』への関与、自らとビートルズを重ね合わせるイメージ戦略といった輻輳的な理由が存することを指摘している。</p> <p>第Ⅱ部「80年代—ビートルズとの「和解」以前」（3章）、第Ⅲ部「ゼロ年代～2010年代—ビートルズとの「和解」以後」（3章）では、第Ⅰ部で概括した村上のビートルズ受容史に沿いつつ、具体的な小説の分析を行っている。第Ⅱ部では、最初に初期の村上作品におけるビートルズの「影」を抽出して、マザー・グース・ルイス・キャロル—ビートルズといった「ノンセンス」の系譜の意識化を指摘する。さらに『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985）を対象として、音楽の「対位法」による小説構成や時間芸術としての音楽の特質について検討した。続く『ノルウェイの森』（1987）では、登場人物たちによる楽器演奏の行為に着目して、それを他者との共鳴の希求の喩として読解した。</p> <p>第Ⅲ部では、はじめに『海辺のカフカ』（2002）を、サイドの「故郷喪失者（エグザイ</p>			

ル)」と関わる音楽用語「移行（トランジション）」の概念によって読解し、音楽の「物語性」の意味を説いた。短編小説「ドライブ・マイ・カー」（2013）、「イエスタデイ」（2014）を扱う章では、関連する文学・映画作品や作品生成過程を追いながら、各タイトルを借用したビートルズの楽曲との比較を精密に行って、ブルースや映画的な手法が意図的に導入されていることを示した。

論文全体を通して、村上にとって音楽は単なる小道具ではなく、音楽こそが村上の小説作品の新たな側面を照射し、文学の性格をも規定する方法的原動力であることを明瞭にしえている。1990年代の作品のさらなる検討などの課題は残されているものの、音楽に関する村上の言及や同時代の関連する文化事象を丹念に収拾、その資料の上にとって実証的にテキスト読解し、さらに体系だてて論じていく手腕は確かである。村上春樹文学の根幹に挑むとともに、広く日本近現代文学と音楽の相関性の探求にも接続しうる論考として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)